第 2018-30 号

恵みと真理のニュース

2018 年 7 月の五次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

［証］

偶像崇拝をしながら生きて来た私を神様の子供として、永遠な命を得て礼拝する楽しさを悟るように導いてくださった神様の恵みと愛に感謝します

私は偶像崇拝がひどかった家庭で6人兄弟の中で３番目で生まれ特に祖母の愛をたくさん受けて育ちました。家族の中で特に私が祖母の話を聞き従ったからもっと愛をもらったようです。祖母は家に祭る甕を作っておいて福を願いました。学校に通うときには友達をついて教会に行きたがったですが、家族の中で一人でも教会に行くと家が滅びると耳にたこができるほど祖母から聞いて、怖くて行けませんでした。
１９８０年に篤実に偶像崇拝をする家で嫁に行きました。ところが、運転をする旦那に毎年ことに交通事故がありました。いくら熱心に生きながらもお金は集まらなくてどこかで漏れることが多くてなかなか家庭の経済が良くなかったです。その間、生まれた子供達も頻繁な病気で止まなくて病院によく行きました。巫女を呼んで祭祀をするとすべての問題が解決されと思いました。期待して巫女の家によく行って巫女が言った通り何でもやりました。しかし、問題は解決できなくて生活はもっと貧しくなりなりました。長男は喘息を患って、次男は食べると下痢をする病名もわからない病気を患って高熱でよく病院の応急室に行きました。
ある日は村にある洋品店に行って服を買いに行ったら服を売ろうとはしなくて私に聖書を見せながら、イエス様を信じなさいとして一時間が越えるほど伝道しました。昔の私だったら裏の空で聞いて聞こうともしなかったが、その日は福音に耳を傾けました。聞きながらも怖くて“私たちは教会に通ったら行けません。と外に出る私に店の主人は“主日に私が家に行くね。子供たちと一緒に教会に行こうよ。”としました。逃げようと家に戻って来ましたが、その店の主人の話が波のように私の心を響きました。主日になるとその店の主人が“教会に行かないといけない。”と予言のように心から響いて耐えらなかったが“教会には行けない。”と思って朝ご飯は適当に済ませて親戚の家に避けました。３週間そのように繰り返しました。
ある日、旦那が出勤するうちに交通事故を起こしました。急に合議金が必要で隣の米屋に話をしたら教会の区域長だった店の主人から借りて解決しました。そのようにその交通事故をまとめをすると私が仕える偶像が真の神だと考えて今まで熱心に仕えたのに“しかるに何ぞや”と裏切られたと思いました。“これから偶像崇拝するのをやめようと思って区域長に探しに行って私も教会に連れて行ってくださいと頼みました 。
教会に行く前に私の家で区域礼拝をささげて初めて歌った讃美歌が３３８章でした。“父なる神様、委ねて手を挙げ主を仰ぎます 。”この賛美を歌う時に聖徒の前で大きく泣いて私を助けてくださいと訴えました。奇異な事でした。初めて神様にささげた礼拝でしたが言葉では表現できないほど、今まで経験しなかった感情が交じました。礼拝をささげた後、区域長が私の部屋に貼ってある守り札を剥がしました。そしたら、私の心がどうか平安になるか飛ぶように心と体が軽くて私を抑えつけたすべての恐れがなくなり、春に雪が溶けるようにすべてが消えました。
その後、礼拝時間が待ち望むようになり、礼拝ことに賛美をすると感激の涙がとまらなかったです。今までなかった新しい感情ができました。風に揺れる草を見ても神様の能力と愛を感じながら感動して感激するようになりました。神様が与える神霊な楽しさと大胆さ、そして天国に対する希望は私にとって旦那の迫害や婚家からの非難 や信じない姉と兄のあざ笑いや環境の難しさなどすべてのことを耐え担えることができました。
神様は私の信仰が成長する過程の中で私の家族の病気も治療してくださいました。喘息と下痢で苦労した二人の息子が神様から癒され恵まれて健康になりました。そして、今まで、脊椎奇形で思う存分に歩くことができなかったし、座って立ち上がる時にかなり苦労した私も神様に切に祈ったら驚くな恵みで治されました。その後、２５年が過ぎた今も少しも問題なくよく歩きながら活動するのに全く不便ではありません。

“主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。”（使徒言行録16：31）御葉に委ね親と兄弟の救いのため祈ったら子供たちが神様を恐れ熱心に礼拝生活をするようになり、病気にかかった母もイエス様を自分の救い主で受け入れて３年後、天国に召されました。スワンにある葬式場で母の葬式をする時、信じない家族まで同意して神様に礼拝することができました。そして、すべての葬式を終えて家に変えようと車に乗って葬式場から抜け出すと葬式場の隣にあるガソリンスタンドで数人の死亡者が発生した大型の爆発事故が起きました。私たちの家族は神様が守って保護してくださったと言って、胸をなでおろしました。
その事を見て父も福音を受け入れてイエス様を受け入れて信仰生活をして天国に召されました。姑も３年半、ナーシングホームでいる間、牧師と伝道師の続けての訪問を受けてイエス様を信じた後、私の信仰生活に力ある後援者になってくださり、神様から呼ばれて天国に召されました。
まことに悲しい事もありました。神様を畏れた息子が社会生活をしながら次代に礼拝を疎かにしたのです。そうするうちに長男は巫女の娘であることも知らなく付き合って結婚して息子を生んでからその息子の名前をヨハネと名をつける問題と様々な信仰に関連する問題の衝突のあげく離婚しました。そのなかでも孫が神様の愛を受けながらよく育てられているので神様が守ってくださる恵みに感謝をささげます。今年９歳になった孫、その孫が祈る時、“私たちの家族がイエス様を信じて天国に行けるように導いてください。今日も神様が守ってくださって感謝します。”と祈る姿を見て私は大きく慰められます。そのように孫と私が熱心に祈っているので息子も神様の恵みで強い信仰を持つようになり、 神様を恐れ、委ね愛して生きるのを願い信じ期待します。
日々、天の父なる神様の懐に近づくように導いてくださる愛に感動して感激します。万個の口が私にあってもその口で主を賛美する。”日々神様に賛美しても足りないとほど讃美歌の作詞家の心が深く感じられるその日々を生きるように導いてくださる神様に感謝します。永遠な命と天国を所有して下さり、この世でしばらく行きずりの人生旅を生きていく間にも一人でほったらかしずに炎のようひとみで守ってくださる神様、救われた感激と喜びが充満になり再臨するとき主を待ちながらどんな艱難の中でも賛美させる神様にすべての栄光をささげます。

［信仰コラム］　健康と癒しのための律法

”愛する 者よ． あなたのたましいがいつも 恵まれていると 同じく， あなたがすべてのことに 恵まれ，またすこやかであるようにと， わたしは 祈っている。”（ヨハネの第三の手紙 2 節）

神様は人の寿命はある程度限定しておいたが、生きる間は健康に生活しようと努力するのは奨励なさいます。従って、人がどうすると健康な生活ができるかについて聖書の多くのページを割愛して記録させました。健康と癒しのために神様が与えられた律法が現代医学でもそのまま適用されているという事実を調べてみましょう。
病原体の伝染と感染を予防するために神様が与えられた律法の規例が旧約聖書のレビ記と民数記に記録されています。
19 世紀中頃に至るまでは光学顕微鏡も電子顕微鏡もなかったので病菌に対する知識がありませんでした。これによって病を治療する時に様々な問題が現れました。その中で一つが手術の後に発生する敗血症で多くの患者が命を失うことでした。しかし、倍率の高い顕微鏡が製作されながら病菌の存在と性質を分かったので 20 世紀に入っては病菌の除去のために手を洗って外科手術をすると手術後の死亡率が急激に減りました。水で体を洗うことの重要性は旧約聖書レビ記の 15 章や民数記 19 章にすでに記録されています。人々が衛生学的に水で洗う行為の重要性をろくに分かったのはただ 150 年もなりませんでした。しかし、聖書はこれより 3300 年も先にモーセを通じて律法で命令なさいました。レビ記 15 章 13 節は清潔のために洗うが”流れる水で洗いなさい”としました。今日、外科医者は手術の前に手を洗う時流れる水で長く洗います。万が一、たらいに水を入れて洗うと水が汚染されて細菌が手に再びつくからです。
神様はモーセに今日私達が持っている聖書の一部になる多くの戒命を与えてくださいました。伝染病予防の歴史で神様が与えてくださったこの様々な法規の影響を調べてみます。
ヨーロッパでここ数百年の間ハンセン病で死んだ人は数百万人に至りました。ヨーロッパをより暗くしたもう一つの疾病は黒死病です。14 世紀に黒死病で 6 百万人が死亡しました。医者達は途方に暮れたので指導的な役割を教会が担当しました。教会は旧約聖書に具体化された感染概念をその指導原理として扱いました。ハンセン病に対して聖書レビ記の指示をそのまま従って患者を隔離させました。この処方はレビ記 13 章 46 節に”その 患部が 身にある 日の 間は 汚れた 者としなければならない． その 人は 汚れた 者であるから， 離れて 住まなければならない． すなわち， そのすまいは 宿営の 外でなければならない．”という御言葉に基づきました。この律法は衛生法の最初の典型としてみなすことができます。ヨーロッパの国々が聖書の検疫隔離期間の適用がハンセン病を抑制することをみて彼らは黒死病に対しても同じ原理を適用しました。その結果、数百万人の命が救われました。
今日、医学界では人間の口を通じて、正確に話すと唾を通じて病原菌が伝染される可能性が多いという事実を常識に知っています。最近は、常識的な次元で外科手術の時、マスクの着用を基本で一般の人も風邪を引くとマスクを着用します。しかし今から 3400 年前にモーセがマスクの着用を聖書に記録しました。レビ記 13 章に”らい病人は口ひげを覆いなさい”、”汚物、排泄物は人の居る所から離れた所の地を掘って埋めなさい”、”汚染されたことは水で洗ったり、火で燃やしなさい”と記録されています。ある種類の病者は隔離するようにしました。
当時に人々は伝染性を持ったバクテリアやウイルスのような病原体の存在を想像だにできなかった時代に生きました。顕微鏡の発明と細菌学の発展等、医学の進歩によって聖書のこのような律法が単に宗教的な戒律ではなく神様が与えてくださった疾病の予防と癒しの方策という事実を知りました。”「あなたが， もしあなたの 神， 主の 聲に 良く 聞き 従い， その 目に 正しいと 見られることを 行い， その 戒めに 耳を 傾け， すべての 定めを 守るならば， わたしは，かつて エジプト びとに 下した 病を 一つもあなたに 下さないであろう． わたしは 主であって， あなたをいやすものである ”神様の御言葉は人々の健康と癒しのために与えられた福のある約束であり、また命令です。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

無益な誇りと有益な誇り

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

今日の本文には、使徒パウロの信仰的な体験が二つに大別されています。その一つは、幻しと啓示であり、他の一つは、激しい苦難に起因した悟りです。使徒パウロは、この二つの種類の体験について自分の意見を表明しました。これは、私たちが主意深く聞かなけれなりません。

その中で、まず調べるのは、彼が体験した主の幻しと啓示に関するものです。
イエス・キリストを信じて信仰生活をすることになると、信仰的な体験をすることになります。だいたいこのような体験は、信仰に役に立ちます。しかし、このような体験を他の人に話す場合には無用の誇りになったり、有益な誇りにもなります。使徒パウロは、彼が体験した主の幻しと啓示について非常に慎重に言いました
「わたしは 誇らざるを 得ないので， 無益ではあろうが， 主のまぼろしと 啓示とについて 語ろう わたしは キリストにあるひとりの人を 知っている． この 人は 十四年前に 第三の 天にまで 引き 上げられた それが， からだのままであったか， わたしは 知らない．からだを 離れてであったか， それも 知らない． 神がご 存じである この 人が それが，からだのままであったか， からだを 離れてであったか， わたしは 知らない． 神がご存じである パラダイス に 引き 上げられ，そして 口に 言い 表わせない， 人間が 語ってはならない 言葉を 聞いたのを， わたしは知っている」（コリント人への第二の手紙 12：1～4）しました。パラダイスに連れられて行った使徒パウロの体験談は、わずか三節に過ぎず、非常に簡単です
パラダイスの具体的な話はしていません。次に続いて言うのを、**「もっとも， わたしが 誇ろうとすれば， ほんとうの 事を 言うのだから， 愚か 者にはならないだろう． しかし，それはさし 控えよう． わたしがすぐれた 啓示を 受けているので， わたしについて 見たり 聞いたりしている 以上に， 人に 買いかぶられるかも 知れないから．そこで， 高慢にならないように， わたしの 肉体に 一つのとげが 与えられた． それは， 高慢にならないように， わたしを 打つ サタン の 使なのである」（コリント人への第二の手紙 12：6,7）**しました。使徒パウロは、自分が体験した、パラダイスに連れられて行った主の幻しと啓示に対して、詳細に言わない理由を二つにまとめて言いました
第一に、無益な自分の誇りになるからだとしました。第二に、他の人がパウロ自身に対して過度に評価しないようにしたいとしました。主の幻しと啓示を体験して愚かで無用な誇りにならないように切除して、慎重に言う使徒パウロの態度を私たちが見る必要があります。今まで見たことは、使徒パウロの信仰的な体験の中で主の幻しと啓示に関するものでした
次に調べるのは、使徒パウロが体験した激しい苦難に起因した悟りに関するものです。
使徒パウロは非常に深刻な問題がありました。
使徒パウロはそれを「肉体のとげあらゆるサタンの使者」と言いました。これらの表現だけでは、それが正確にどのようなものかを知ることは困難です。そして、いくつかの推測を持つようにします。″
肉体にとげあらゆるサタンの使者」は、使徒パウロが直面する様々な誘惑を意味するとの見方があります。様々な反対と迫害を意味するという見解もあります。あるいは言語障害と見方があります。もより説得力があるものでは、眼とそれによる頭痛との見方です
「肉体のとげ」という使徒パウロの表現は、肉体に苦痛を与える、その何かであることを意味しているからです。しかし、聖書に「肉体のとげ」すなわち「サタンの使者」が何を言うのは具体的な言及がない以上断定することはできません。聖書にそれを明示していない理由は、使徒パウロの肉体にとげに対応されることが、私たち一人一人にもすることができて、それは人ごとに異なる種類の可能性があるからです。この時間私たちが見てみようとするのは、使徒パウロが持っていた″肉体にとげ」が正確に何であるかということではなく、使徒パウロがその肉体にとげのために得た悟りに関するものです.

第一に、使徒パウロは、彼があまりにも傲慢しないために、神が彼に肉体にとげを与えられたという事実を悟りました。

言い換えと肉体にとげは使徒パウロが常に謙虚にするために、神様が与えられたのです。使徒パウロは、誇り**心**があるかもしれない条件をたくさん持っていました。 **肉体**的にもそうです。彼はパリサイ人であってガマリエルの門下で律法の厳しい教訓を受けました。主の仕事のために献身したキャリアと業績にも誇りできる値します。多くの聖徒たちの尊敬を受けているという事実もそうです。霊的な体験にもそうします。すべての人は、高慢やすい傾向を持っています。使徒パウロも同じです
パウロにある「肉体のとげ」は高慢を制御する役割をしたのです。私たちにも、やはり高慢になるのを制御するこの何かが必要です。誰も高慢になる傾向を持っているからです。聖徒の皆さんにも解決されない痛みを伴う問題があれば、使徒パウロの悟りを自分のものにしてください。使徒パウロは、その悟りを**「そこで， 高慢にならないように， わたしの 肉体に 一つのとげが あたえられた． それは， 高慢にならないように， わたしを 打つ サタンの 使なのである」（コリント人への第二の手紙 12：7）**と言いました

第二に、使徒パウロは、神が与えられた肉体にとげによって祈って、彼に与えられた神の恵みが足りるという事実を悟りました。

使徒パウロは、「肉体のとげ」があまりにも深刻な問題でした。そして、これを離れるように神に三回求めました。これは使徒パウロが「肉体のとげ」から抜け出したいと思うのが非常に激しいし、真で切実に祈ったことを教えてくれます。ところが、使徒パウロの願いのために、神の答えは「神の恵みはあなたに十分である」という言葉でした。私たちに与える、神の恵みは、とげを受け入れても残るほど多めです。神様が与えられる「十分で満ちる恵み」とは、イエス・キリストにあって注がれる「神の愛」です。
聖徒たちのために神の愛は、私たちにすべての困難を十分に勝っていただきます。また、神様が与えられた満ちる恵みとは、神様が、キリスト・イエスのゆえに、私たちに与えられた最終であり、完全な救いです。それは罪の赦しを受け、神の子どもになって、天国で永遠に主と一緒に暮らすことです。皆さんに問題がどんなに大変で苦しいても、キリストによる神の愛と救いを考えならばそれほど大きな問題ではありません。キリストにあって与えられる神の愛と救いは、とげを持った信徒のための「満足な恵み」です

第三に、使徒パウロは、神が彼に与えられた肉体のとげにより、自分の弱さが、神の力を留まるきっかけになるという事実を悟りました。

肉体的苦難、精神的苦しみ、経済的苦難などいくつか種類の苦難でも人は苦難を通して、自分の不足と弱さを実感して正しく認識するようになります。実際、使徒パウロは、「肉体のとげ」の問題を持っても、地中海をめぐる広大な地域に福音を伝え至る所に教会を設立し、活動家を建てた。自分の不足と弱さを知らない人は、神の力には、無知な人です。自分の知識や能力に自信のための神の力への渇望もなく、神の助けを依存している心もない人は、むしろ可愛そうな人々です
聖徒の皆さんには「私は弱い時に強いからである」という言葉が体験から湧き出る告白になって証しになるのを願います。使徒パウロの肉体にとげがあったように、あなたにもとげと同じ問題があるでしょう。時には、すぐに除されるとげもあり、長い間苦しみを与えるとげもあります。それだけでなく、この世を離れ去る日まで除されないとげがあります。とにかく、このとげが主を信じて愛する皆さんに益を与えることになります。 ①あなたが傲慢しないように制御する役割をします。 ②神様が恵みとしてそのとげを十分に耐えるようになるでしょう。
③そのとげにより、自分の不足と弱さを知り、主の能力を渇望して依存するため、キリストの力が皆さんにとどまると強くなることです。そして、「私は私が直面しているいくつかの弱いものと侮辱、苦痛と迫害と困難を喜びとなる」「私の弱いものを誇り仰せられる。」「私は弱いときにこそ、強くである。」と言うことができると思います

使徒パウロは、自分が体験した主の幻しと啓示を言うとき愚か「無益な誇り」にならないよう切除し、慎重に言いました。一方で彼に神の力を留まるし、彼を強くした肉体にとげとあらゆる苦難に対して大きく喜ぶように誇りました。「有益な誇り」で考えるからです。聖徒の皆さんは、個人の体験に属する幻しと啓示に対して切除し、慎重に言うも、苦難を通して体験した主の恵みと力に対して大きく喜ぶうよに誇りしてください。